
クロスベルの一番短い日

久湊恋那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロスベルの一番短い日

【NZコード】

N2280Q

【作者名】

久湊恋那

【あらすじ】

「英雄伝説 零の軌跡」アフターストーリー。

リベルに帰還する前日、エステルはレンとのお料理教室を計画するが・・・

「そりゃあもちろん対抗するのよ、対抗！」

「・・・ええと、何に？」

「ロイドくん一家に！」

その場の勢い思いつきで初めて使ってみた造語に意外な位しつくり来る味をせしめて、その余韻に浸ることにしばらく氣を取られたせいで、あたしは自分の声が予定よりもだいぶ大きくなつていた事に気が付くのにだいぶ時間をかけてしまった。

「・・・なあに、エステル。ナイショのお話なんてしないでレンも混せてほしいわ。」

「どうか、アパートのキッチンスペースに向かつて料理本のページをパラパラとめぐっていたレンが、元々大きな瞳を見開いて更に大きくして丸くして、こっちを振り返るまではまるで気が付けなかつた。

「ううん、なんでもない、なんでもないのよー今そつちに戻るから！・・・もう、ヨシュアはちょっと黙つてて」

「いや、もう明日リベル行きの飛行機に乗る予定で、それで夜までに荷造り済ませなきゃいけないこの状況でいきなり料理始められたら、突っ込みたくもな、」

「レン、何作るか決まつた？」

ヨシュアの言い分は綺麗に華麗に優雅に無視して（大げさな表現したけど割りといつも通りの風景だつたり）、どうせ呆れてるか溜め息ついてるか開いた口が塞がつてないかのどれかなんだからと開き直つて反応を確かめもせずにレンのもとへと舞い戻る。

諦めが付くまでに時間を要したかのような少しの間があつて、いつも結局こうなんだからとかそんなような誇張ナシであたしが今までに100回は聞いたと思う文句を呴きながら、ヨシュアが荷造りを再開する気配を背中で拾つた。うーん、ごめんヨシュア。

「ねえ、何の話をしていたの~レンの話でしょ~」

「ねえレンってば、それより何作りたいのか教えてよ。ん、む
こじこじ」

後ろからレンの左肩に顎を乗せて、両手でその左右のほっぺを突つたり、つまんだりする。チータがスベスベで、レンはフワフワなのだ。

・・・ノリで適当にやつているみたいに見せかけているけれど、本當はどういうタイミングでなら違和感なく実行できるか虎視眈々と狙つていたのよね。これでレンを捕まえたらやつてみるぞリスト4／158を達成できたわ。・・・次の課題は一緒にトランプかな。「もう、誤魔化さないで！質問してるのはレンの方なんだから！」ほつぺたムニムニーの件はともかく、質問に質問で返したのはたしかに隠蔽工作の一環だったから、指摘されて自然「う、ばれたか」みたいな表情で応えてしまう。・・・やっぱりあたし、トランプはやらない方がいいかも。

それはさておき、田の前でレンがフワフワをブクブクにしてあたしをにらんでいてもやつぱり言い難いのよね。この前ロイド君たちの居る特務支援課分室にお邪魔したら、なんかすつゞく美味しいボンゴレスパゲティが出てきて、なんかロイド君もエリイさんもランデイさんもティオちゃんもすつゞく幸せそうで、なんかキーアちゃんが「キーアがロイドと一緒に作ったのー！」とか嬉しそうに言つてて、なんかロイド君は二二二二しながら「そんなことないよキーアが殆どやつてくれたんだ」みたいな事言つちやつてて・・・むむむむむ。対抗意識燃やしちやつたの一、だなんて。その時はまだレント再会する前だったからつていうのもあって、余計に。だなんて。面と向かつて告白するにはちょっと恥ずかしいじやない。うん。

・・・レン。エスティルはね、この前ロイド君たちの居る特務支援課分室にお邪魔したら、なんかすっごく美味しいボンゴレスパゲテ

ヨシュアが、・・・憎いあんちきしじうが、自分のベッド脇の本棚に向かつてクロスベルに捨てていく本とリベルに持つて帰る本とを分別して積み上げていく手を休めることさえしないまま、読心術でも使つたのかつて位に正確に、一字一句間違いなく、あたしの複雑な心中をつらつらと読み上げてみせた。

「どうかこれ、多分さつきの仕打ちに対する復讐よね。あたしの自業自得の可能性が首をもたげてくるなあ、これからはヨシュアにも優しくしようつと。・・・つていう誓いを2日前にも立てたんだつたつけ。

「・・・はあ。エステルってば、そんなこと考えていたの？」

「ううん、ぜえんぶあいつの妄想よ。忘れてちょうどいい、レン。」

につこり。

「嘘付かないで。ぜえんぶエステルの顔に書いてあるわよ」
あんな長い文章全部書いてあってたまるか！という大人げ無いツッコミは飲み込む。そしてそれを3度目になる質問に変換してから吐き出してみる。

「ところで、レン。どの料理に挑戦するのかは決まった？」

幸い、レンは素直に応えてくれた。

「うーん・・・いろいろ見てみたけど、レンは何でもいいわ。エステルが決めて頂戴」

「え、あたしが？」

今度はこっちが唸る番だった。

とりあえず適当にページを躍らせて、料理本様と相談してみる。
ホットケーキ・・・は、ひっくり返すのが難しいから嫌だし。
カレーライス・・・は毎回、火加減を失敗してるし。
野菜炒め・・・は野菜切るのが大変そうだし、つてあれ？もうあたし何にも作れないんじゃあ・・・。

「何よこの本！全然ダメじゃない！」

「いやダメなのはエステルだと思つよ？」

「ダメねえ、エステルは」

「うう・・・ヨ、ヨシュア！ あたしはあんたの為を思つて色々考えてあげてるのよ！？ また焦げたハンバーグ食べさせられたいの！？」

「またプライドもへつたくれも無い怒り方だね」

やたらと厳しい言葉ばかりがあたしの頭上めがけてぱらぱらと降ってくる。あたしは何となく決まりが悪くなつて、唇をすぼめて人差し指と人差し指をつんづん・・・する代わりに、レンのスミレ色の髪の毛をふわふわといじくつた。

てつきり嫌がられるかと思つたら、意外にもレンは皿を細めて気持ちよさそうに「こやーん」とか言つちやつていた。うーん、これをリベルまでお持ち帰りできちゃうのかー、とかしみじみ口に出す。

・ したらどうせオジサンとか言われるだけなので黙つていた。

・ ・ ・ オムライスなら得意なんだけど、実を言つとの機会にあたしも料理のレパートリーを増やしたい、つていづ田論見もあつたりするのよねこれが。

「・ ・ ・ とにかく何でもいいから一品作るわよー。それでウチにロイド君たちを招待して、あたしとレンで作った料理を自慢・・・、じやなくて食べさせてあげるのよー！」

「ああ、やつぱり僕は最初っから一人で荷造り係確定なんだ。・ ・ まあ動機は不純でもロイドたちを呼ぶのはいいかもね。色々お世話になつたし挨拶も兼ねて」

「うんうん、ヨシュアも段々物分りが良くなつてきたじゃなーい。」「はーはーはー」

返事が一個多いどこの話じやない。

「あー・・・、ねえレンこれなんかどうかしら。」

あたしの誕生日とレンの年齢をヨシュアの生まれ年で割つた数を指すページ・・・とかいうことは全くナシで、その時たまたま開いていたページに印刷された料理の写真を指差してレンの顔色を伺つ。

・ ・ ・ ピーマンの肉詰め。

「嫌よ。レンはピーマン嫌いだもの」

「え、 そうなの？」

あたしの『惑いのシャボン玉を、そこで初めて』に振り向いたヨシコアの笑い声が割る。

「あはは、ピーマンつていうか野菜全般が昔から苦手だよね、レンは。まあ大半が食わず嫌いだけど」

「・・・へー。つて、じゃあ殆ど食べられるもの無いじゃない、力レーも野菜炒めもシチューもサンドイッチも野菜入ってるんだから！」

今度は驚きの風船が頭の中に浮かんできて、誰も止めてくれないから言葉と一緒にどんどん膨らんでいつてしまつ。レンは珍しくもあたしのその勢いにやや気圧されたようだ。

「べ、別にそんなのレンの勝手じゃない。食べられなくても別に、・・・その、今まで何とかなつてきたもの」

言葉尻を濁しながらも反論する。

あたしはそれを見て迷わなかつた。本来ならもうひょいと迷つべきなんだけど。

でも、ねえ。

「・・・あたしはレー・ヴェと違つて代わりに食べてあげたりはしないわよ」

・・・・・・・・。

そう言つたらレンが、・・・あー、うー、なんて言えぱいいんだろう、うん、何かショックを受けた顔になつてしまつた。ところが、一瞬半べそみたいな表情を作つてしまつっていた。ちょっとびり罪悪感。

「・・・どうして分かつたの？」

「うーん、・・・どうしてだらづ。『めん、何となく』

「・・・・・・・はあ。やっぱ『』のね、エスティルは。レンが認めてあげるわ

・・・そりかなあ。

多分今のだつたら、あたしじゃなくても分かつたと思つのよね。だからすごいのは、あたしじゃなくてレー・ヴェなんだよ、レン。

「エスティルは手厳しいね」

空っぽになつた本棚の埃まで掃除し終えたヨシュアがレンの隣までやつて来る。

「少しだつたら僕が食べる手伝つてあげるよ」

昔、食卓であたしにそう言つてくれるまではもの凄く複雑な交渉と手順を踏ましてきたくせに、そんな前歴を笑顔一つで安上がりに帳消ししてそう言つた。

「うふふ、ありがとう。ヨシュア」

あたしはそんなやり取りをする一人を眺めて、次にさつきのページに目を落として。なんだかさつきから、ちよつとだけほくほくとした感情が胸の中に芽吹いてくすぐつた。

・・・ヨシュアには悪いけれど。

情報処理能力の天才～とか。環境適応力の天才～とか。やっぱり根も葉もない嘘つぱちなんじやないかしら。

だつて、ピーマンが嫌いな天才なんて聞いたことがないもの。

「エスティルつてば、何をにやにやしてるの？」

微妙にあたしの思考回路を察したらしいレンがすねたように見上げてきた。

* * *

「エスティル、右手がお留守だよ」

「え？ あ、」

包丁は諦めて火加減のお勉強をすることにしたあたしは、無発酵パンを作るべく強力粉と塩と水の他人丼をひたすら掻き回していた。・つて言つてる時点で、もう普通にあたしのためのお料理教室になつちゃつてるわね、これ。

しかも気分転換に窓を開けて、そよ風にふらふら揺れるレンの頭のリボンをボンヤリ眺めていたらそれすら満足に出来なくなつていた。だから、体全部を動かさない仕事は苦手なんだつてば。

結局途中から料理チームの一員として動員されていたヨシュアが分担された役割を中断して、さつきまでの時計回りを遂行できていなあたしの右手に注意を促す。あたしは殆ど動きを止めていた右腕

に力を、

「エステル、左手がお留守番してるわよ」

入れようとしたら今度はせっかく在宅していた左腕に注意が行き届かなくなつた。

「うわあ！！」

左手のお役目はボウルを不器用に支えていることだったから、当然のように床に吸い込まれようとしたそれを、あたしの左脇で調味料を漁っていたレン（猫みたいだつた）が当然のようにナイスキヤッチ。

「うふふ、エステルってば本当にお間抜けさんね」

あたしにボウルを返しながら、レンは何処か満足そうに笑う。

「・・・あうー・・・、『めんなさい』・・・」

流石に落ち込みながらレンに謝つた。なんか、当初の予定と全然違う。『すごいわエステル、やれば出来るんじやない』とか言つてもられるのを想像して一人でにやけていた一時間前が恥ずかしい。思い出して、思わず流しの隅に溜まつた小さな水溜りの辺りに視線を逃がす。

というか、ほっぺをつついて髪をいじつてリボンに見とれて、どれだけレンに心奪わてるんだろうあたしは。今までの反動、なんて言い訳だけじゃ切り抜け難い醜態じやないの。視線をレンの顔に強制送還させて、そういう意味も込めてもう一度謝ろうとした時、レンが少し不自然なタイミングで口を開く。

「まあ、じついう時くらいはレンがいなくちゃダメってことね」

自然と、一瞬呼吸ごと動きを止めるという不自然な行動に出てしまつた。

違うのに。

こういう時だけじゃないのに。

いつだってあたしはレンがいなくちゃダメだよ。

そう言い返せばいいのに、今それをして伦には伝わらないつてことを、絶対、絶対に、伝わらないんだつてことを、よく分かつて

もいた。

だから消化不良で、悲しみだけが残つた。

どうしてだろう。レンってば、勘違いしてるのよ。

あたしは別に、辛い思いをしたレンに救いの手を差し伸べたくて琥珀の塔にアクシスピラーに帝国にクロスベルに、搜しにきたんじやないんだよ。

あたしレンのことが好きなの。

結社について欲しくない、なんていうのもただのエゴなの。

たとえ結社がとっても幸せな場所で人殺し集団なんても嘘っぱちで実はみんなレンのことを大事にしてくれる家族で友達でレンはそこではお姫様で本当に本当の意味で世界一幸せで、

それでもあたしは多分嫌で、レンに傍にいて欲しくて、一緒にお喋りしたり遊んだりしたくて。

それだけなのにな。

・・・ううん、でも大丈夫よ。絶対にいつか、引っ叩いてでもそれを信じさせてあげるんだから。

そんな思考を巡らせながら窓の外に目を向ける。夕焼け空だった。綺麗なオレンジ色が夕闇に溶け込んであたしの目を洗う。

数日前の、アルモリカ古道の遺跡でしゃがみこんでヨシュアと眺めた、同じクロスベルの夕日を自然と思い出す。レンに会いたいと思つていた。ヨシュアが手を握つてくれた。ロイド君たちが来てくれた。

もう一度、思い出から今日の前にある夕焼けにピントを合わせる。あの日と同じ空に見えるのに隣を見たらレンが居た。

・・・うん。何とかなる。

大丈夫だ。

「よーし、あたし、ふつか一つっ！」

『大丈夫』の証拠に、元気良く叫んでみた。

「・・・？」

レンが不思議そうにこっちを見る。

やつぱり顎をなでたら「口口口」て言つのかしい。

「安心したよ」

ヨシュアはやわらかく微笑んでくれた。あ、ひょっとして心配かけてたのかな。

「いつも通りで」

音を立ててボウルが床と衝突して、中身が全部ぶちまけられた。

* * *

「・・・ええっと、エステルはどうしたんだ？」

「ああ、気にしないでいいよ、ロイド。いつもの事だから」

「あうー、ロイド君たちを羨ましがらせる大作戦があ・・・」

「？」

結局失敗した。作り直そうにも時間がもう無かつたし。

ぜんぜん大丈夫じゃないわよ、あたし・・・うう。完全に空回りだ。ああもう、恥ずかしいなあ。

で、それなのにわざわざこいつまで来てもらつのも変な話、ってことであたしとヨシュアは、明日リベールに出発することをロイド君たちに報告するため特務支援課の分室まで足を運んでいた。

「レンも来てくれればよかつたのに」

「まだちょっと決まりが悪いみたいでさ」

ヨシュアたちのやり取りを見ながら一人で落ち込んでいたら、丁度一階から降りてきたランティさんと田が会う。

「おっ、エステルちゃんたちじょんか！元気だつたか？」

・・・支援課の人たちはみんな愛想がいいなあ。

「うん、お陰様で。えつと、そういうばキーアちゃんは？」

いつも元気いっぱいにお出迎えしてくるキーアちゃん（ご機嫌が最高潮の日はタックルのオマケ付き）の姿が見当たらないので気になる。・・・そういうばティオちゃんとエリイさんも居ないみたいだ。「え？・・・あー、いや、えーっと・・・。なはは。今キー坊はちよつと取り込み中つづーか・・・」

いつも豪快なしゃべり方をするランティさんの歯切れが何となく悪

い

すると、ヨシユアと話していたロイド君が何故か、少し慌てた雰囲気を纏いながらこつちを振り返る。その顔に漫畫みたいな汗マークがぶら下がっているのを見逃さない。拳動が微妙にスロー・モーションのものあたしが感じ取る違和感に拍車をかける。

「え、と、エステル、ギアのことなら気にしないで……」

二〇

うん。あたし、ロイド君とだつたらトランプでも勝負になるかもしない。

あ、なんだ。キーアちゃん一階に居たのね。・・・ロイドくんも「ンティさんも何をそんなに必死になつて隠してゐるんだか。

ギーの方ちやんかとだとだと一段飛ばして階段を駆け下りて来る音で最大限に自己主張してくる。

あれ？

レンつて今、アパートに残つてゐるはずよね?なのに何で「こんなところに居るの?」

咄嗟にそんなことを思つた。

でもそんなわけがない。現在進行形であたしにタックルをかますのは正真正銘、キーアちゃんだ。・・・リボンがいっぱいあしらわれた、真っ白なフリフリのドレスを着た。

「あ、見られちまつたが・・・」

ランティさんがその場にしゃがみこんで頭を抱え、アガツト顔負けの赤毛をぐしゃぐしゃと搔き混ぜる。

えーっと、これって……どうこういふこと?・

いつもの一割り増しの勢いでキーアちゃんに突撃されたせいで実は吹っ飛ばされて尻餅をつかされていたことを差し引いても、思考の

足取りがおぼつかなさすぎて纏まらない。

「ねえー、エリイ、ティオー！やつぱりこの服、動きついでーーー！」

「」

キーアちゃんが可愛らしい顔とは相容れない抗議の声を上げて、今駆け下りてきた階段の方を振り返った。その頭にリボンまで発見する。

「エ、エステルさん……えーっとね、これはその……ぐ、偶然なの。おほほほほ」

「……エリイさんからなんかギクシャクした笑みを貰ってしまった。
「……エステルさん……」
「……」

ティオちゃんに至っては困ったような顔をして黙り込んでしまう。
・・何故かこっちが悪いことをしている気分になつた。あ、目を逸らされた。

「ああもひ、恥ずかしいなあ」

ティオちゃんの沈黙をロイド君が溜め息と赤面で引き継ぐ。
あ、ロイド君今、鏡みたいだ。ちょっと時差があるけれど。
そう思つた瞬間、やつとの状況の意味がすとんと飲み込めて。

「あ・・・あはは・・・、えつと」

どうしよう。言いたい事がたくさんある。でもどれから言葉にすればいいんだろう。

さつきまでとは全然違う意味で恥ずかしくなつてあたしはうつむく。
一人だけ今の複雑を理解できていない、きょとんとしたキーアちゃんと目が合つ。そのドレス姿を改めて見直してまた恥ずかしくなる。

「ロイド」

そのままのポーズでもそれが誰の声かは分かつたんだけど、でも顔を上げる。だって、このままキーアちゃんを見詰め続けてたら顔面沸騰するよ……。

顔を上げるとロイド君の名前を呼んだヨシュアが、恋する乙女としての意見をここで言わせてもらえるなら百点満点の嫌味が全く無い

綺麗な笑顔を浮かべていた。

「ロイド、ありがとう」

「…ヨシコア、えらい。かんぺき。」

「え？ いやお礼を言われるようなことは俺達、全然…」

「そ、そつよ。むしろじめんなさい。その、なんと言つかじんな…」

・、あからさまな、といつか…」

「ありていに言えば、パクリですね。すいません」

「いやティオク、お前はしさぎよすぎだから」

ヨシコアの一言のお陰で火照りの消えた気分で、あたしを押し倒した体勢のまま不思議そうにロイド君たちを眺めるキーちゃんに視線を戻す。

この子、天使みたいだ。

こんなにも簡単に、人に幸せを運んできてくれるなんて。

「だけど」めんね、あたし今すぐに帰らなくちゃ。

一秒でも早く、レンの顔が見たくなっちゃったもの。

(後書き)

はじめで読んでくださつありがとうござむ。
初の一一次創作で少々緊張しております。・・・
よろしければ掲示板にて「意見」「感想をどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2280q/>

クロスベルの一番短い日

2011年6月16日03時02分発行